

タイトル 『人の香り』 作 石原 燃

登場人物 女2人

高田香織 ……三十二歳。

高田淑子 ……六十二歳。香織の母親。

都内某所。高田家のリビング。

使い込まれた家具や鉛色になった床のデザインから、この家に流れた年月が感じられる。

舞台中央下手寄りに布ばりのソファ。その手前に木製のローテーブル。室内は、全体的に几帳面に手入れされた印象があるが、ソファにはピッチがついたままの洗濯物が山になっている。

上手奥のカウンターには、電話や書類、バラが生けられた花瓶が並び、その裏がキッチンになっている。

シンプルな花瓶に活けられたバラは、小振りのイングリッシュローズで、淑やかな濃いピンクの花弁は、飾り気のないこの部屋に明るい彩りを添えている。

カウンターの手前には四人がけのダイニングテーブル。その上には、ティーカップが二つ飲みかけのまま置かれている。

ダイニングチェアの背には着古された緑色のカーディガンが掛けられており、バラの葉と対をなしている。

下手には庭に繋がる大きな掃き出し窓。

正面奥に廊下に繋がる扉。

客席からは見えないが、廊下に出て下手側に玄関と階段、上手側に浴室やトイレ、娘の個室がある。

五月の夜。

部屋に灯りが入ると、ソファに高田香織が座っている。

彼女はけだるそうに座ったまま、自分の場所を確保するために押しや

った洗濯物をローテーブルに移動させている。

香織はベージュのロングスカートに白いシャツ姿で膝掛けをかけている。白いシャツと言ってもくたびれた生地の子で、あまり清潔そうな印象はない。洗濯物の山でよく見えないが、右足だけがスカートから覗いていて、左足は膝から下がわからないのがわかる。

傍らには松葉杖とグローブを思わせる無骨な皮の鞆。

香織は、洗濯物を移動し終えると、カウターのバラを見つめる。

そして、鼻に両手をあて、その匂いを嗅ぎ、両手を見つめる。

廊下に行く扉が開き、義足を抱えた女が慌てて入ってくる。

母親の淑子である。

義足は、樹脂製の黒いソケットや金属部分が露出している。

淑子はまだ新しく見える張りのあるTシャツにシンプルなパンツ姿で、春らしい上着を羽織っている。

淑子は息を整えながら香織を見つめ、義足を差し出す。

淑子 ごめんね、待たせて。ほら、これ……

香織 (義足を見もせず) 臭い。

淑子 え？

香織 バラ、ひどい匂い。

淑子 (義足を持った手を下ろし) 変わらないじゃない、いつもと。

香織 部屋の中にまで飾ってるからよ。庭のだけで充分なのに。

淑子 だって、折角いただいたんだし。

香織 どっか持ってたよ、それ。

淑子 バラに当たってもしょうがないでしょ。

香織 当たってなんかいいわよ。臭いから、臭いって言ってるの。

淑子 ……上に持って行くわ、あとで。(再度、義足を差し出し) ……これ、前の。随分使ってないけど、大丈夫かしら。ちょっと着けてみて。

香織 擦れるのよ、そのソケット。

淑子 しょうがないでしょ、新しいの作り直すまでは。

香織 置いといて、その辺に。

淑子 着けないの？

香織 着けたくないのよ、今は。

淑子 どこか痛むの？ 大丈夫？

淑子、香織の膝掛けの上から左足に触れようとする。

香織 (反射的に) 触らないで。

(間)

香織 今日はまだ寝るだけだから。

淑子 大丈夫なの？

香織 なにが？

淑子 え、足。

香織 義足？

淑子 足よ、あなたの。

香織 ああ、足ね。義足がなくても足は足か。

淑子 ……ねえ、なにがあったの？

香織 そこ開けて。

淑子、香織の視線を捉えようと身体を近づける。

淑子 話せるでしょう？ 私には。

香織 換気。

淑子 こっち見なさい。

香織 (はじめて淑子を見て) お母さん、化粧崩れてる。

淑子 いいから、そんなこと。

香織 いつも、人の顔に文句つけるくせに。

淑子 慌てて行ったんでしょ？ あなたが、動けなくなったって言うから。

なのに、車の中でも黙ったままで。

香織 別にいいけど、すっぴんだろ？、なんだろうが。

淑子 説明して、お願いだから。

香織 開けてよ、窓。

淑子 話すのが先。

香織 いいわよ、じゃあ。

香織、立ち上がろうとして、鈍い動きで松葉杖に手を伸ばす。

仕方なく、淑子が窓をあけてやる。

香織 (外の匂いを嗅いで) 意味ないわね、これじゃ。

淑子 (庭のバラを見て) 満開なのよ、久しぶりに晴れたから。見える？

香織 もういいわ、閉めても。

淑子 どうしたっていうのよ、ほんとに……

香織 閉めてっば。

淑子、窓を閉めて、香織の方へ向き直る。

淑子 ねえ、なにがあったの？

香織 のど乾いた、水ちょうだい。
淑子 はぐらかさないで。

香織 水。

淑子 飲んだら話してくれる？

香織、黙ったまま淑子を見上げる。

淑子、キツチンへ行き、グラスに水を注いで、香織に渡す。

香織、しばしの間、グラスを見つめている。

そんな香織を見つめる淑子。

淑子 ……わからないのよ、どういうことなのか。だって、わからないじゃないのよ、そんな風に黙ってたんじゃない。

香織 言ってるでしょ？ 盗まれたって。

淑子 聞いたわよ、それは。だけど、ただそう言われたって…

香織 外してたら、持って行かれちゃったのよ。

淑子 どうして…

香織 セックスする為に決まってるでしょ。

淑子 そうじゃなくて…

香織 ラブホテルでピクニックしてるとでも思った？

淑子 そうじゃなくて、どうして義足なんか盗って行くのよ。

香織 さあね、マニアだったんじゃない？

淑子 誰なの？ 相手は。

香織 知らない人。

淑子 ……連れ込まれたの？ 無理矢理力づくで。

香織 したかったから、ついて行った。それだけよ。

淑子 震えてるじゃない、あなたずっと。

香織 (水を飲み) 空調効き過ぎなのよ、あのホテル。

淑子 入ってなかったわ、空調なんて。

香織 じゃあ、アルコールのせいよ。飲んでたから。

淑子 知らない人と？

香織 (グラスを返し) 悪い？

淑子 だってそいつなんでしょ、義足盗んだの。そいつ？ そいつら？

香織 強盗団じゃないんだから。

淑子 乱暴されてないの？

香織 セックスのこと？ したわよ、それなら。

淑子 そうじゃなくて！

香織 カーディガン取って。

続く